

呪腕先生は人理修復後、  
ハルケギニアに呼ばれ  
たようです

海棠

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ハサン先生が大好きすぎたため書いた。反省はしてない。

不定期。めっちゃ不定期。

12/22. 2018: ルイズの令呪デザインを変更しました。

# 目次

第1章：貴族養成学園トリスティン

第1節：呪腕先生、呼ばれる | 1

第2節：ハサン先生、契約する

7

第3節：ハサン先生、授業を受ける

22

第4節：ハサン先生、お手伝いする

45

第5節：ハサン先生、決闘する

55

第6節：ハサン先生、説明する

69



# 第1章：貴族養成学園トリスティン

## 第1節：呪腕先生、呼ばれる

彼の冒険は終わった。

人理は完全に修復され、自分が施設にいる理由もなくなつた。別れは惜しかったが役目は終わった。

今思えば自身のマスターはあまりにもお人好しであまりにも皆に対して対等に付き合つていたと思う。それは無論、自分にも対等に向き合つていた。

こんな過去をすべて捨て去り、右腕に体を蝕まれ、浸食された自分にも、だ。

座の中で彼は短刀を的の狙つた場所にすべて命中させながらふと思いに更けていると何か引つ張られる感覚がした。

「・・・むっ？」

どうやら誰かが自分を呼んでいるらしい。

呼ばれたとならば出向くのが我ら<sup>サージェント</sup>の常識。

今度のマスターはいったいどんな人なのだろうかと思いをはせながら彼は自分の座をあとにした。ついでに短刀は回収した。

彼女ことルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは唯一名門のヴァリエール家の三女である。

容姿端麗、頭脳明晰、成績優秀、しかも歩く姿は優雅であり、かわいらしい。はつきり言つて非の打ちどころのない超がめつつちやつく美少女である。

しかし彼女にはある欠点が存在していた。

短気なこと？それもある。だがそれは一つの個性でしか過ぎない。受け入れてしまえばかわいいものだ。

ワガママ？それもある。だがそれも一つの個性でしかない。彼女の要旨ならいくらわがまま言つても許されることだろう、たぶん。

え？じゃあ何が一番ダメだつて？それは・・・

B  
O  
O  
O  
O  
O  
O  
O  
M  
!!!!

「おい、ルイズウ！ まだ召喚できねえのかよお!!」

「これで計24回目の爆発だぞお!! いい加減にしるよなあ!!」

すべての魔法が爆発してしまうことだろうか。

原因は誰も知らない。彼女自身もなぜ爆発してしまうのかわからない。だが爆発する。小さいころからなぜか爆発してばかりだ。

そして今は使い魔召喚の儀式の最中だがいつも通り爆発している。

いつもなら踵を返してどかどかと帰るところだがそれは問屋が卸さないし、なにより彼女のプライドが許さなかった。

しかも今日のやっていることは授業でいつもやる小手先の魔法ではなく、今後の人生のパートナーであり、自分の属性を決める重要なきっかけにもなる使い魔の召喚。

よって彼女は必死になるのだ。何もかも爆発してしまう自分の魔法属性を知りたいがために。

「見ていなさい……ッ！ あんた達の使い魔では到底及ばないくらい、神聖で美しく、そして強力な使い魔を召喚してみせるわ……!!」

地獄のような声と表情をしながらルイズはうなった。絶対に見返してやる。そんな強い意志が彼女の眼には心には秘められていた。

「宇宙の果てのどこかに存在する私のシモベよ……神聖で美しく、そして強力な使い魔

よ!!私は心より求め、訴えるわ!我が導きに…答えなさいッ!!」

次の瞬間、類を見ないほど強烈な爆発が起こった。あまりにもめちやくちやであまりにも自己的なオリジナルの詠唱。しかしそれは心からの懇願だった。彼女には強い意志があつた。何がなんでも成功させてやる、自分を笑つたやつらを見返してやるという強い意思があつた。

だからこそなのだろう。英霊とは、強い意志思に呼ばれるものなのだ。

「ゲホッ……ゴホッ……」

爆発によつて舞い上がった粉塵が喉に張り付く。不快感で咳が出る。

ああもうだめだ。自分は落ちこぼれた。一生馬鹿にされ終わるんだ。彼女はすさまじい自己嫌悪に陥り始めていた。

「いやどう見ても失敗だろっ!」

「ありえねええだろっさすがにこれはっ!」

周りからの冷やかしや嘲笑、避難が聞こえてくる。彼女は唇をかんで涙を流すことを必死にこらえていた。

「これは……どうなんですかねえ?」

教師であるコルベールも爆発の影響で爆心地が煙でよく見え、召喚が成功している否か判断ができなかった。



しかし運命はとても気まぐれだ。時には牙をむくし、時には優しく抱擁する。今回運命は彼女に味方したようだ。

一陣の強い風が吹いた。それは土煙を吹き飛ばし、爆心地の中心部が見えるようになるまで視界をクリアにさせた。

「あれ？何かいるぞー！」

誰かのそんな言葉が聞こえ、周りの少年少女達の目が一齐に爆心地の中心に向けられた。うそだ、まさかそんなばかなことが、という声もちらほら聞こえる。

彼らの目が向けられた先には、確かに何かがあった、まだうつすらと煙が煙っていることから、よく見ることができないが、確かに何かがある。黒い何かがそこにはいた。彼らの目から見ても割と大きめのその黒い何かは地面にうずくまっているように見えた。

ルイズはそんな状況の中、わずかな希望に縋りつくように震える足で、ゆがむ視界で、ただどその足取りはしっかりと、一歩づつ、確実にその黒い何かに近づいていた。

そしてその黒い何かの前まで来た瞬間、黒い何かはすくつと立ちあがた。

「ぴゃあっ?!」

彼女はびっくりしてしりもちをついた。そして見上げるとそこにはかなり大きい亜人が悠々と立っていた。

黒い布を頭からすっぽりと羽織り、顔には骸骨を模した仮面をつけており、その表情

をうかがい知ることはできない。時節見える肌は異常に黒く、生気をあまり感じさせない。

そして彼女が何よりも気になるのは右腕だった。それは何か長いものを隠しているかのように黒い布で覆われていた。

しかし、そこを気にしていてもらちが明かない。彼女はよいしよつと立ち上がる。すると黒い何かはタイミングを見計らっていたのか仮面の下の口を開いた。

「サーヴァント・アサシン。陰より貴殿の呼び声を聞き届けた。

——問おう。貴方が私を求めしマスターか？」

これはゼロと呼ばれ馬鹿にされてきた少女が暗殺教団の長おきとともに世界中を駆けめぐる物語である。

## 第2節：ハサン先生、契約する

「ま、ますたー？私が？」

ルイズは呆けたような声でそう言った。いまだに現実が飲み込み切れていないらしい。

「ええ、その通り。貴殿が望んでおられたのでここに参上いたした次第。貴殿の目となり剣となることをここに誓いましょう」

「え……？そんなに簡単に認めちゃっていいの？」

「……？どういうことですか？」

「え、だって、私たちまだ会って10分すらたっていないのよ？それなのにそんなこと誓っちゃっていいの？」

「……私は誰がマスターであろうと付き従うのみ。これだけは譲れませぬ」

「え、でも……」

「ヴァリエール嬢、契約は早めにすました方がいいですよ？」

彼女が彼のあまりの献身ぶりに困惑しているとコルベール先生が口出ししてきた。人が悩んでいる最中なのになに口出ししてんだこのハゲと彼女は思ったが口に出さな

いことにした。

「あ、あの……」

「？」

「ち、誓いのぎ、儀式をするから、その……かがんでくれないかしら?!」

「承知」スツ

するとアサシンは素直にひぎを曲げて顔をルイズの高さに合わせる。

「あの……」

「？」

「その仮面、はずせるかしら？」

「縫い付けておりますゆえ無理ですな」

「フアツ!!!」

さらっ!と言ったが何言ってるんだこいつ、とルイズは内心パニックになった。

「しかし、なぜそのようなことをお聞きに……？」

「こ、こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこうするからよ」

すると彼女は間髪入れずに彼の口にあたる部分にキスを落とした。次の瞬間、シユ

バツと彼は後ろに下がる。

「何をしておいでですか魔術師殿！自分の身は大事にしなければいけませんぞ！」

「あんたはお母さんか！」

「そもそもヌグウ?!」

するとアサシンは左手を抑えた。何か焼き付くような痛みが走ったのだ。少しするとその痛みは引き、代わりなのは知らないが甲に何か文字が刻まれていた。

「・・・?」

アサシンは不思議そうに自分の左手を見つめているとコルベールが近づいて話しかけてきた。

「あの・・・」

「?」

「左手にある文字、拝見させてもらっても?」

「どうぞ」

特に隠す必要性もないので彼は素直に左手を見せるとコルベールは興味深そうにそれをしげしげと眺めていた。

「ふむ、珍しいルーンですね」

そう言いながらコルベールは彼に刻まれているルーンをさらさらと書き写した。

「では今日はここで終わりです。皆さん、帰りましょう」

そして移し終えた手帳をパタンッと閉じると彼はふわっと空に浮かび上がった。

彼は少しびっくりしたが彼のいた環境では普通に人は飛んでいたのであまり気にしないことにした。

「ルイズは歩いて帰れよな！」

「あいつレビテーションどころかフライもできないもんな!!」

そういうと周りの人間が笑いだす。

ルイズはイラつきながら浮かんでいく人たちを見た。

アサシンはそんな彼女を眺めていた。

すると彼女はこつちを見るとつぶやいた。

「帰るわよ」

「承知」

するとアサシンは左手でルイズをしっかりと抱える。

「・・・え？」

「魔術師殿、しっかりとつかまっていますぐさ」

次の瞬間、二人は風になった。周りの景色がどんどん後ろの方に流れていく。途中にある障害物をまるでそこにはないかのようには踏破していく。

そして空を飛んでいたやつらをぶつちぎりで追い抜いて一番乗りで到着した。

ルイズは思った。

(あれ？私結構すごい使い魔を召喚しちゃった?!?)  
と。

夜、アサシンとルイズは自室にいた。

「で、改めて自己紹介させてもらうわ。私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。あなたを召喚した人よ」

「ではこちらも。サーヴァント・アサシン。魔術師殿の目となり剣となり盾となることを誓おう」

「その・・・」

「？」

「そのアサシンって名前偽名みたいなものなの？本当の名前ではなさそうよね・・・？」

「・・・その通り。これはクラス名。そして私は暗殺者のサーヴァント。闇夜に紛れて殺すことなど造作もない」

「あ、うん。もつと聞きたいことがあるわ。その、サーヴァんとつてなに?」

「サーヴァントとは英雄が死後、祀り上げられ英霊化した存在のことです。まれに反英雄や守護者、神霊、幻霊など詳しく説明すれば膨大な量になりますからここは割愛しましょう」

「えつと・・・、つまり?」

「私は過去の人間です。つまり故人です。しかし『今』に遅れを取るつもりはありません」

そういうとアサシンはふと窓越しに空を見た。天には二つの月が浮かんでいた。

「なっ・・・」

さすがの彼もこれには驚愕した。自分が知っている世界では月は一つしかないのだから。

「・・・魔術師殿」

「なによ」

「少しばかり私にも質問させていただきたい。ここの名前は? 国は何という?」

「ここはトリステイン王国よ。常識でしょ?」



「ではさらに質問を。今の西暦は？」

「せいれき？よくわからないけれど、始祖ブリミルがハルケギニアに降臨したのが今から6000年位前の話らしいわ」

「・・・ッ」

今度こそ彼は確信した。自分は完全に別世界に呼ばれたのだと。並行世界では断じてなく、別世界。何もかも常識が違うのだ。パラレルワールド

よくよく考えたら魔術が秘匿されていない時点で気づくべきだったと彼は思った。

「・・・魔術師殿、一つ心して聞いてほしいことがあるのですが」

「？」

「私は別世界から来たようです」

するとルイズは何言ってるんだこいつみたいな表情になる。

「あんた何言ってるのかしら？」

「その発言は百も承知です。ですが、私の知っている夜空には月は一つしか浮かびませぬ」

「それこそあり得ないわよ。月は二つなんだもの」

「確かにここはそうですが・・・」

「と・に・か・く・私は確認しておきたいことがあるのだけれど」

「・・・何でしょう?」

「薬草とか、探せる?」

「なにか写真でも見せてくれれば探せますぞ」

「しゃしん? なによそれ」

「おおっと、これは失礼。私の世界の単語をつかってしまいました」

「えーと…探せるのよね?」

「情報さえ渡してくれば探せるかと」

「わかったわ。ところで」

「?」

「あなた私と五感をリンクできるかしら?」

「ふむ・・・ではお互い少し意識してみましよう」

「ええ、わかったわ」

すると二人は意識を集中し始めた。片方はムムツと、もう片方は瞑想するように意識を相手に集中させる。

「・・・わっ」

彼女は声を上げた。彼は彼女の五感が自分とつながったことを感じた。今彼の目は彼女の目、彼の耳は彼女の耳。

「……うぷっ」

すると急に具合が悪くなったのか彼女は口を抑える。彼は無理やりリンクを切るとすぐに彼女の背中をさすり始める。

「大丈夫ですか、魔術師殿。あまり無理をなされるな」

「い、いや、大丈夫よ。ちよつと鋭かっただけだから……」

「……我々サーヴァントの五感のうち特に視力と聴力は人間よりも高くなっておりますゆえこのような事態になったのでしよう。ですから少しお休みをなされるといい。休めば次の日には気分もよくなりましょう」

「あんた、主夫なの？」

「暗殺者です」

「ああ、そう……あ、これ」

そう言いながら彼女は彼に何かを手渡してきた。なんとそれはブラジャーだった。

「?……?!ま、魔術師殿！」

「んあ、なによ」

「このような下着をホイホイと男に渡すものではありませんぞ！」

「あんた従者じゃない」

「それはそうですが……！」

「じゃあお休み」

「・・・はっ。よき夢を」

すると彼女はすぐに眠りこけてしまった。彼はそれを見やると窓からするりと抜け出し、部屋をあとにした。

「ふむ・・・どうやら中世ごろぐらいか」

そう口にしなから彼はとある屋根の上で街並みを眺めていた。前のマスターたちの冒険が自分にこうして知識を与えたのだ。

「大気中の魔力も非常に濃く呼吸をするだけで魔力を補給できる。しかもこれだけ明かりが少なければ闇夜に潜みやすいというもの。なかなかいい世界ではないか。・・・ん？」

そう静かに分析していると彼の目にふと留まったものがあつた。それは大人が子供を無理矢理路地裏に引きずりこんでいる姿だつた。

「・・・」

次の瞬間、彼は跳んだ。

「おらっ、手を焼かせんなー！」

「むぐー!!」

その男は貧乏だった。お金がなく、毎日の生活に困っていた。しかし彼は働くことが嫌いだった。ずっと親のすねをかじっていた。

彼はあるとき、思いついたのだ。

子供を売ってしまおうと。

そうすれば働かずに金は自分に入ってくる。相手側も満足する。まさに Win Win の関係だった。

そして今もこうして子供を拉致する。

しかし、今日は運が悪かった。

ドンッ

「うわっ」

「うお?!」

何かにぶつかった。子供とも男はしりもちをついてしまう。

「デメエ、どこ歩いて…!」

男はぶつかった相手に暴言を吐こうとして、つまった。相手があまりにも異質だったからだ。

まず第一印象として黒かった。そのものを黒だけが支配していた。しかし顔は違った。顔は白い骸骨を模した仮面が張り付けられていた。一見してみればその顔だけが暗闇に浮かんでいるようにも見える。

「て、てめえは…・な、なにもものだ」

「…」

次の瞬間、その黒い影は男の目の前まで一瞬で移動すると脇腹に拳をめり込ませた。

「かはっ…!」

男はたまらずうずくまる。

「坊や」

「え…? 僕…?」

「そうだ。この男は私が相手をするから君はもう帰りなさい。親が待っている」

「う、うん！」

すると子供はとたとと路地裏を出て行った。

ここからは暗殺者の領域である。一般人にはまず見せられない自分たちの仕事の時間だ。

彼は男の胸ぐらをつかんで無理やり立ち上がらせると壁に強めに押し付ける。

「貴様」

「な、なんだよお」

「あの子をどこに連れて行くつもりだった」

「だ、誰が教えるかクソツタレ」

「ほう・・・ならば」

そう言いながら彼は男を地面にねじ伏せると短刀を男の首元に突きつける。

「これでもはかないか」

「う、うわあああああああ」

「さあ、はけ」

「わ、分かった。吐くよ。吐けばいいんだろ?！」

すると男は吐いた。貴族の名前も、どこにその貴族の豪邸があるのかも。そしてなぜ自分が子供をさらうのかも。すべてはいた。

「……これで全部か」

「あ、ああそうだ。だから約束だ。見逃してくれ。頼む」

次の瞬間、短刀は男の首に突き刺さった。抜くと大量の血があふれる。痙攣し始めたが少しするとピクリとも動かなくなった。

「……自分の怠惰たいだのために罪なき子供をさらうなど、生きる価値もない。恥を知れ。」

……それに約束した覚えなぞない」

彼はそう吐き捨てるとそのままその場をあとにした。

しばらくして街にはとある貴族とその取り巻きが何者かによって殺されたという噂話が流れた。それと同時に行方不明になっていた子供たちも帰ってきた。



その子たちはみな口をそろえてこう言ったらしい。  
「黒くて大きな人が助けてくれたような気がする」と。

### 第3節：ハサン先生、授業を受ける

まだ生徒の子供たちが誰も起きていない中、廊下にその姿はあった。

まるでそこにいないかのような存在感の薄さ、それとは対称的に大柄な肉体。それを覆う黒い布。白い骸骨を模した仮面。

そんな彼の名は『アサシン』。彼は何かを探すようにふらふらと廊下を歩いていた。

「かなり広いな……。この間取りもいずれば把握しなければ……。」

そんなことをつぶやいていると背中に何かぶつかつたような感覚がした。それと同時に何かが床に落ちる音がした。

「……。む？」

彼が後ろを向くとそこにはタオルに埋もれている誰かがいた。

「大丈夫ですか？」

とりあえず例文のような言葉をかけながら彼は埋もれている人の手をつかんでタオルの山から引きあげる。

出てきたのはメイドだった。黒い髪にそばかす。綺麗というよりは可愛い系の子だ。どことなく極東系の顔つきをしているように見える。

「え、あ、ありがとうございませ．．．ぴやつ?!」

そんなことを考えているアサシンに対して彼女はお礼を言おうとしたが彼の顔を見た瞬間悲鳴に変わった。顔には恐怖がうつる。

そんなに怖いだろうかと彼が少しナイーブな気持ちになっているとメイドが話しかけてきた。

「あの、あなたは．．．?」

「ああ、すまない。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢の従者として呼ばれた、名を『アサシン』。以後お見知りおきを」

「あ、えっと、私はシエスタと申します．．．あの、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔の方、ですか?」

「ご存じで?」

「はい、少し有名になっていましたから」

すると彼は少し不機嫌になった。サーヴァント、特にアサシンのクラスは一部を除いて隠密を常とするクラス。それが有名になることはあまりにも己にとつて不都合なことだった。

(まあ、今更か)

「ところで、その．．．」

「ん？ああ、これですか。魔術師殿に頼まれてな。しかしどこに洗い場があるのか  
わからず困っていたところなのです」

「あの・・・、それなら私が代わりにしましょうか？」

「かまわないのですか？構わないのならうれしいのですが」

「かまいませんよ。さき、私に任せてくださいいな♪」

「ではお言葉に甘えて。あとはよろしくお願いします」

そう言つて下着を手渡すと彼はその場から姿をかき消した。またシエスタはびっく  
りした。

ところかわつてルイズの私室。戻ってきたアサシンは己を霊体化してドアをすり抜  
けると彼女を起こすためベッドによる。

「むにやむにや・・・くらいなさい、キュルケ」

「・・・」

「フフフ…いい気味ね」

「…コホン。朝ですよ、魔術師殿」

「んん…?」

ルイズはゆさゆさと体をゆすられて夢から徐々に覚醒する。

そして目を開くとそこには仮面をつけた大男が立っていた。

「ぴゃあっ?!」

彼女はびつくりして飛び起きた。その拍子にベッドから落ちるとそのままゴロゴロと転がって距離を取る。

「いてて…あんた誰よ?!」

「もう忘れでおいでですか?!」

「…ああ、そうだったわ。私が召喚したんだったわ」

「着替えはこちらにありますぞ」

「ああ、うん。…ん?」

「どうかいたしましたか?」

「え、いや、右手…」

彼女の右手を見るとそこには赤い模様が刻まれていた。

「む・・・それは令呪ですな」

「れいじゆ？」

「ええ。我々サーヴァントと契約した時に出る、絶対命令権のようなものです。昨日は手袋をつけておりましたし、すぐに寝たので気づかなかったのでしよう」

「へえ・・・」

「ちなみにそれは3回までしか行使できませんので慎重にお使いください」

「え・・・、あ・・・、ええ」

「・・・使おうとしましたね？」

「・・・」

「・・・再度申しますが慎重にお使いください」

「わ、わかったわよ！何度も言わなくてもいいじゃない！」

「失礼いたしました。では私は外で待つておりますので」

「え？着替えさせてくれないの？」

「・・・あなたは好きでもない男に肌を触られたいですかな？」

「いや、いやだけど」

「そういうことでございます。ではごゆるりと」

そういうとアサシンは部屋から出る。それと同時に隣の部屋の扉が開いた。出てきたのは赤い髪に褐色肌の豊満な女性だった。ルイズを人形と例えるなら彼女はいかにも人間の女性らしい体つきというべきだろうか。

「あら」

「む」

二人はぼつたりと遭遇した。そしてお互いがお互いの特徴をつかむように眺める。まあ、彼女の方からしてみれば仮面に覆われている彼の視線や表情などいかがうことな  
どできないのだが。

「あら、あなた・・・ルイズの使い魔よね？」

「そうでございませうが？」

「・・・ローブ越してよくわからないけれど、なかなかいい体してるわね。・・・  
えば自己紹介がまだでしたね。私の名前はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・  
アンハルツ・ツエルプストー。代々伝わる由緒正しきツエルプストー家の娘です」

「ならばこちらも。私の名はアサシン。この度はルイズ殿のサーヴァントとして召喚さ  
れた身でございませう」

そう言いながらアサシンは一礼した。

「なかなか礼儀正しいですわね。ところで・・・もしよろしければ私の熱くたぎる劣情を

受け止めてくださらないかしら？」

「（・・・何を言っておるのだ？こやつは）・・・いえ、私にとって今仕えるべき主はルイズ殿一人でありますゆえ、あなたのお誘いには乗れませぬ」

「あら、つれないわねえ」

「それに」

「？」

「自分の体は大事になされよ。見ず知らずの男に自身の純潔を売るなどあまりにも無用心ですし、何よりあなたが後々後悔することになりますぞ？」

「・・・ああ、そう。そこまで言われたら別に悪い気分はしないわね。でも、あなたは少し勘違いをしているわ」

「・・・？」

「私は情熱と欲望に生きる女なの。情熱はたぎればたぎるほど燃えるし燃えれば燃えるほどたぎるの。それに私は欲望をあまり隠さないようにしているわ。だから、さっきのは本音よ？」

「・・・なぜそのような生き方を？」

「簡単よ。欲のない、情熱もない人生なんて、あまりにもつまらないじゃない」

それを聞いた彼は仮面の下で眉間にしわを寄せる。彼女の言い分は正しい。人生に



は何かのアクセントが必要だ。強弱もない人生なぞ、つまらないに決まっている。

実際彼もそうだった。彼は暗殺教団の長になるために必死に努力していた時期があった。しかし、彼はすべてそつなくこなせたが特筆すべき「業」がなかった。寿命という期限があるが故焦った彼は外に手を出し、見事山の翁に襲名した。だがそれでも確かに高揚感と満足感があった。しかしそれは彼が全てを失い、歴史に埋もれることになる羽目になるとはその時の彼は思いもしなかった。

これらすべては彼の大きな欲望が招いた結果である。だからこそ彼は欲望の危険さを人一倍よく知っているという自負があった。

そのことを話そうかと迷っていると再び部屋の扉が開いた。

「ちよつとキュルケ！何人の使い魔に粉掛けようとしてんのよ！さっさと散りなさい  
！」

「あら、ルイズじゃない。おはよう」

「おはよう。じゃなくってね！」

「この人、ルイズの使い魔よね」

「ええ、それが？」

「見たこともない亜人よねえ」

「それについては同意するわ」

「これでも元人間ですが」

「あんたみたいな人間がいてたまるか!」

「でも、私の使い魔には劣るわよねえ。おいで、フレイム」

すると部屋からキュルキュルと鳴きながら尾の先端に火のついた竜が出てきた。その姿を見たアサシンは布の下でこっそりと短刀を構えた。対してルイズはどこか悔しそうな表情をしていた。やはりうらやましいのだろう。

そんなルイズを見た彼女は満足そうに微笑むと「ごめんあそばせ」とその場を離れていった。その後姿を彼はずっと注視するように睨んでいた。

「ところで!」

するとルイズから話を切り出した。彼はスツと顔を彼女に向ける。

「なんでございましょう?」

「あなたキュルケに話しかけられていたけど、まさか鼻の下とか伸ばしてないでしょうねえ?!」

「伸ばすもなにも・・・そもそも鼻がありませんね」

「ええ!!!」

「それよりも魔術師殿、授業は急がなくてもよろしいのですか?」

「そ、それより先に朝食よ。・・・アサシン、運んでくれる?」

「喜んで」

彼は昨日と同じように彼女を抱えるとそのまま廊下を疾走した。

「貴方なかなか速いわね」

「恐縮の極み。我々サーヴァントにとってあなたのような娘を一人抱えて走ることに造作もない事でございます」

「サーヴあんというのは貴方みたいに全員力持ちなわけ？」

「いえ、我々の中でも強弱大小男女さまざまサーヴァントがおりますが筋力もまた人それぞれ。ですがそれでもどれだけ低くても人間を圧倒できる程度の筋力があります」

「へえ、皆力持ちなのね」

「まあ確かに一般人と比べたら皆そうなるでしょう」

一部のサーヴァントにケンカを売るような会話をしながら食堂に入ってくる二人。周りの生徒はみな食事をとり始めており、彼女らは一番最後に入ってきたことがわかる。

そして彼女が席に着こうとしたとき彼がさりげなく席を引くと彼女は少しうれしそ

うな顔をした。

「あら、なかなか気が利くじゃない。あなたにはこの床に置いてあるスープで済ませようと思ったけど、気が変わったわ。これもあげちゃう」

そう言つて彼女は鶏肉を彼に手渡す。しかし彼は手に取つて少し眺めるように見つめるとそのままルイズのお皿に置き返した。

「あら、食べないの？」

「ええ、私はとある事情で人の食事を受け付けられない体になっておりますゆえ」

『『『?!?!』』』』

さらつと彼が言ったことに周りの生徒も驚愕が隠せない。

何より一番動揺を隠せないのはルイズ本人である。あわあわと口をパクパクさせている。

（え？…え？受け付けないってどういうこと？こいつ自己申告だけ一応元人間よね？なんで受け付けないの？人間食べなきゃ死んじゃうのよ？それなのに受け付けないってどういうこと？病気の？）

「それに魔力さえ補給できれば私は現界できます。お気遣いなく」

「うん、ああ、そう…そうなのね」

「そうでございます」

くしばらくしてゝ

朝食を周りより少し遅く終えたルイズとアサシンが教室に入ると全員がこっちを見ながらひそひそ話をしていた。

耳をそばだてるとどうやら侮蔑の声が多いようである。

少しムツとしながらルイズは席に着く。もちろん彼は彼女のそばにたたずんでいる。

まるでそれは亡霊のように、まるでそれは騎士のように、まるでそれは従者のように周りからは見えたことだろう。

「おはようございます」

そんな中教室に入ってくる少し年を取った女性。彼女の名前はミス・シュヴルーズ。二つ名は「赤土」。ここの教師であり、温厚な性格と生徒からはもっぱら評判がいい。

「皆さん、春の使い魔召喚は成功したようですね。皆さんの姿が見られて私はとてもう

れしいです」

そしてルイズの方を向いておや、という風な顔をして言った。

「あら、ミス・ヴァリエールは見たこともない巫人を召喚したのですね」

するとマルコリヌが騒ぎ始めた。

「おいおい、ルイズ！ そんな使い魔を召喚してどうするんだ！ 手伝いさせることし

かできねえじゃねえか!!」

するとクラス全員が笑い出す。

言われた本人はとても悔しそうな顔をしたがそれを見たアサシンはすぐに彼女に耳打ちをする。

ボソツ「魔術師殿、こ奴らの言葉に耳を貸すな」

「え・・・?」

「こ奴らはこうして人を馬鹿にしなければ己を確立させられぬ身。それと比べたらあなたの方がよほど己を確立させられておられる。魔術師殿、気にすることはありませぬぞ」

「え、あ、うん・・・そうね、そうよね」

「それに言われるならば言い返してしまえばよいのです。言うということは言われる覚悟があるということ。そしてあなたは私とほかの使い魔との違いをすでに理解なさら

れているはず。ハツタリでも勢いよく言えば案外状況をひっくり返せますぞ？」

するとルイズはフンスと意気込み、スツと背筋を伸ばした。そして周りの奴らを見てハントツと笑い、堂々と言い切った。

「あら、じゃああなたたちの使い魔はしゃべれるのかしら？アサシンみたいにしゃべって身の回りをいろいろとサポートしてくれるわけじゃないのに、どうしてそうあたかも自分の使い魔は優秀だと思ってるの？」

するとクラスがシイン：となる。あるものは気まずそうに視線を背け、あるものは悔しそうに彼女をにらみつける。

「はいはい、皆さん口論はそこまでにして授業を始めますよ」

そう言いながらシュヴルーズは手をパンパンと叩くと黒板にカツとチョークを押し付ける。

彼女の授業はとても分かりやすかった。もともと聡明なルイズは当然として前回の職場の関係で知識を一部かじったことしかないアサシンでも内容を理解できた。

曰くこの世界の魔法の属性は【火】、【水】、【土】、【風】、そして過去に失われたとされている【虚無】の5つに分かれている。

曰くこの世界の魔術師は【ドット】<sup>一</sup>【ライン】<sup>二</sup>【トライアングル】<sup>三</sup>【スクウェア】<sup>四</sup>の4段階がある。

そして授業は流れ錬金の話になった。ミス・シウルヴルーズが石に唱えると金色の何かに変えた。

「それって金ですか?！」

キュルケが身を乗り出して訊く。欲望に忠実と豪語しているだけのことはある。金目のものには食らいつくのだろう。

「いえ、真鍮です」

先生がそう答えると彼女はつまらなさそうに席に着いた。

「ではこの『錬金』を……ミス・ヴァリエール、貴方にやってもらいましょう」  
すると教室の雰囲気は凍り付いた。

「わかりました」

ルイズは何か問題でもあるの?みたいな感じで席を立ちあがった。

クラスから反対の声が上がる。

「先生、やめといた方がいいと思いますけど」

「そうです。無茶です、先生!」

「『ゼロ』に魔法を使わせるなんて!」

「危険です!」

アサシンは少しムツとした。自分の主人を悪く言われていい気分はしないのだ。し



かし一つ気になることがあった。

（“ゼロ”とはなんだ？なぜこ奴らはマスターを“ゼロ”と呼ぶ？）

「大丈夫です。ミス・ヴァリエールは授業の態度がよく成績もいいと先生の中でも評判です。彼女ならやってくれると私は信じています」

ミス・シュヴルーズの言葉を聞いたルイズは目に見えて歩みをさらに進めた。どうやらプライドと自信的な何かを刺激されたらしい。

「おい、その使い魔！」

するとマリコリヌがアサシンに声をかけた。

「私ですか？」

「お前止めろよ！あのゼロのルイズの使い魔なんだから？！」

「いえ、私は確かにマスターのサーヴァントでございしますが今の私にはマスターを止める理由など存在しませぬ」

「くそが！」

「やめて！お願い！」

キュルケの悲鳴か嘆願にも思える叫び声も無視してルイズはずかずかと壇上に上がる。

全員が机の下に避難する。それを見たアサシンもようやくやくなにかを察知したのか、い

つでも動き出せるように少し前かがみの態勢に入る。

「ふう……」

ルイズは少し深呼吸をする。

「『錬金』!!」

彼女は杖を石に向けてそう唱えた。すると石がカツと光り、爆風が起こった。次の瞬間、アサシンは思わず己のスキル「風除けの加護」を使つてするつとよけるとそのまま窓ガラスを割つて外に脱出し、ととつと勢いを殺しながらステップを踏むように着陸する。そして教室の方へ向き直ると窓からはもくもくと煙が上がっており、嫌でも惨事が起こつたのだとわからせてくれる。しまったと彼は思ったがパスはまだ切れていないからまだ生きているのだろう。大けがしているかもしれないと彼は慌てて再び中へ入つていった。

そこは阿鼻叫喚の地獄絵図だった。使い魔たちは暴れまわり、ルイズには非難の音が飛ぶ。そして非難を浴びているルイズ本人は爆心地の中心にいたはずなのに傷一つついていなかった。ついてはいるならすすくらいであろうか。だが彼女は今にも泣きそうな表情をしていた。

くしばらくして〜

「ねえ」

教室をアサシンが掃除しているとルイズは話しかけてきた。

「なんでございましょう?」

彼は掃除している手を止めると彼女の方に向き直った。

「なんか言わないの?」

「なぜ言う必要がございましょう?・・・しかし、そうですね。言うとするならば、あの爆発とあの威力・・・なかなか見事なものでした」

「なによ、それ。皮肉のつもり?」

「いえいえ、滅相もない。私は別に魔術師殿をとがめているわけではございませぬ。あの威力はいざ戦うときにとても有利になると思った次第です」

「でも・・・、皆のできることをできないのはアレじゃない?」

「アレ、とは?」

「・・・恥ずかしいってことよ。私って小さい頃から馬鹿みたいに努力してたのよ。でも

無理だった。全然成功しなかった。．．．これが落ちこぼれ以外のなんだというの?」

「．．．」

「あなただって本当は分かっているんでしょ? 私の肩書の意味。何もかも成功する確率0のゼロよ? 笑いなさいよ」

「．．．」

「．．．失望したのなら笑いなさいよ! どうせあんたも私を見下してるんでしょ?!」

「．．．魔術師殿」

「なによ!」

「質問を質問で返すようで大変申し訳ありませんが、なぜ見下す必要がありましたよ?」

「え．．．?」

「私はただあなたに従うのみ。落ちこぼれかどうかなど私にはよくわかりませぬ。なぜなら、私は魔術師ではないのだから。ですが、あなたが頭脳明晰で人情に厚いということは何となくではありますが理解しているつもりです。私はこれに不満なぞありません。笑う必要も見下す必要もない。それに」

「?」

「私も生前は落ちこぼれだったのです」

「え．．．?」

「歴代19人いた山の翁、その一人が私です。ですが私は他の候補とは違い、己独自の業を持つておりませんでした。だからこそ外からその業を取り入れたのです。そして生まれたのが今の私だ」

「・・・っ」

「おそらく今の私はあなたに己自身を映しているのかもしれないませぬなあ。ですがこの忠義は本物だと、間違いなく言えるのです」

それは絵画だった。見た人は確実にそう言えるだろう。黒塗りの暗殺者と可憐な魔術師。あまりにも正反対。あまりにも対極。だがそれは違和感なく風景に溶け込んでいた。

「それはそうと魔術師殿」

「？」

「話は変わりますが実をいうと私、以前知り合<sup>メ</sup>いの魔術師<sup>ア</sup>に少しばかり魔術を<sup>デ</sup>ご教授させてもらったことがあるのですが、魔力を使つての爆発は本当に難しいのです。普通は何らかの属性を利用するもの。例えば、水と炎とを組み合わせると水蒸気爆発させるとか、小麦粉を利用した粉塵爆発というものもあります」

「・・・何が言いたいのか？」

「・・・あくまで個人的な感想ですが、あなたには何か才能がある。他にはない、何かの

才能が。爆発だけを起こすなど、それは魔法そのものです。我々の世界では禁忌とされるほどには」

「私が…才能を？」

「ええ、これでも多少は魔術をかじっている身。断言はしかねますが可能性としては」  
見る見るうちに彼女は笑顔になった。自分にも希望があると思っただろう。

「ところで、あの…」

しかしすぐにそれは消えた。どうやらその希望以上に気になることがあったらしい。

「なんででしょう？」

「あなたの仮面の下つてき、どうなってるの？」

「…気になりますかな？」

「ならないっていえぼうそになるわね」

「わかりました。では、後悔しませんね？」

「（…？）ええ、後悔しないわ。それに使い魔の責任は主の責任でもあるし」

「わかりました。ではお見せしましょう」

アサシンは懐から短剣を取り出すと仮面と顔の間に差し込んで縫い付けている糸を切り始めた。

「…なんで縫い付けてるの？」

「先ほど申しましたように私は山の翁を襲名するにあたりそれまで持つていたすべてを捨て去りました。(プツンツ)名前、家族、思い人、故郷。そして自分の顔も。多分あの時の私は死に物狂いだつたのでしようなあ。(プツンツ)・・・まあ、結果として私は歴史に埋もれてしまいました。(プツンツ)」

「えつと、つまり・・・?」

「つまりこういうことです」プツンツ

そういうとアサシンはすべての糸を切り終え、ぱかつと仮面を外す。

そこにあるのは無貌だつた。あるべきところに凹おウがなく、あるべきところに凸とつがなかった。その顔はあまりにも平坦であつた。はつきり言つてしまふと口以外の顔にあるべき部分がすべてなくなつていたといつていい。

「・・・」

「・・・」

「・・・きゅー〜」ボタンツ

「・・・やはり無理だつたか」

そう言いながら彼は再び仮面を顔に縫い付け始めた。チクチクと見えないはずなのに器用に縫い付けていく。まるで以前それをこなしてきたかのように。

「・・・むしろこの顔を見せても引かなかつたあのお方がおかしかつたのかもしれない

なあ」

彼は仮面を縫いあわせ終わると彼女を抱えて保健室まで疾走した。

続く



## 第4節：ハサン先生、お手伝いする

「・・・」

「あの・・・あとは任せてくれてかまいませんよ?」

保健室の教師がルイズの枕元にたたずんでいるアサシンに声をかけてくる。すると彼はくるつと振り向いた。その時顔につけた仮面の眉間にしわが寄っているような気がしたがたぶん気のせいだろう。

「しかし、マスターが気絶してしまったのは私のせいでもあります。ならば起きるまで待つのは当然のこと」

「なかなかに律儀なのですね、あなたは。ですけど、生徒を見守るのも私の仕事ですから。ここは私に任せてくださいませんか?」

「・・・」

「納得できないのは分かります。ですが、あなたは悪気があつてやつたわけではないのでしょうか?それくらいは分かりますよ。たぶん彼女も怒らないと思いますよ?」

「・・・ここは任せても、よろしいですか?」

「ええ、安心して任せてください♪」

「ではこれで失礼」

そういうとアサシンはガラツとドアを開けてそのまま出て行った。

「・・・ルイズちゃんはなかなか素敵に素敵な人を呼んだのね。よかったわ」

くしばらくして

彼が当てもなく廊下をふらふらと歩いていると今朝であったメイドが忙しそうに廊下を走っていた。彼が眺めていると彼女は足がもつれたのか思い切り転んでしまい、持っていたものを手放してしまう。

次の瞬間彼は高速で移動し、落ちる前にすべて素早く回収すると彼女をたたせる。

「あ、ありがとうございます」

軽くほこりを払いながらシエスタは礼を言った。

「いえ、助けられたならば助けるのが道理でございます。今朝の借りは返しましたぞ？」  
「いえいえ、こちらこそありがとうございます。あと借りなんてそんな・・・」

「ところで、何か急いでいるようでしたか何があったのですか？」

「実はこれから昼食の時間なんです。それで忙しくて・・・」

「ふむ・・・」

するとアサシンは顎に指をあてて何か考えるようなしぐさを取る。

「なるほど。ならば私も手伝いましょう」

「え？いいんですか？」

「もちろん。私も先ほどから少しばかり暇を持て余していたのです。それに、こう見えても私は結構力持ちですよ？」

「あの・・・」

「ん、なんででしょう？」

「あの・・・その、右腕・・・」

「ああ、これでございますか」

そう言いながら彼はガチガチに包まれた右腕をポンポンと軽くたたく。

「これは・・・なんと言いましょうなあ。あ、そうだ。実は骨が折れておるのですよ」

「え、そうなんですか?！」

「ええ。なかなか治るのが遅くて困ってしまいましたなあ」

「それは、大変ですね・・・」

「ええ、大変ですよ。ふふッ」

そして二人は食堂へ急いだ。

貴族が食事を楽しむ食堂の裏の厨房。

食堂でコックやメイドが忙しそうに働いている。

彼女に聞いた話だがついさっきまでは今よりも更に忙しかったらしく、これでもまだ落ち着いたほうであるらしい。

「すみません。今戻りました」

「おう、遅かったじゃねえか！つて、お？その大男は？」

「あ、この方はルイズ様の使い魔です。廊下でお会いしたところ手伝うって自分から進んでいってくれました……」

「ああ、あんたがシエスタのいつてた使い魔か！俺の名前はマルトーっていうんだ！よろしくな！」

「ではこちらも。名をアサシン。今後ともよろしく願います」

「おお、礼儀正しいな！で、早速でわりいんだがな？このデザートを運んでくれないか？片腕なのに任せてしまつてすまねえ」

「フフ、かまいませんよ。それに、片腕で仕事をするのには慣れております」

そう言うアサシンは軽々とデザートの入った盆を持ち上げると厨房の外に出た。

すると彼の姿を認識した生徒たちはひそひそと陰口をたたき始める。

「おい、ルイズの使い魔がいるぜ」

「なんでこんなところに亜人がいるのよ・・・」

「おいおい、言つてやんな。可哀そうだろ?」

「まあ、どうせ『ゼロのルイズ』の使い魔じゃ、たかが知れてるわね」

「はっはっは、違うない!」

次の瞬間、彼らの目の前にアサシンは舞い降りた。

「[[[[[[?!]]]]」

「私をとがめるのなら別に構いませんが・・・主殿をとがめるとならば話は別ですぞ?」

彼は遠回しの忠告をするとデザートを器用に配っていく。そして配り終えて視線を別の方に向けてるとそこには何かしらの人だかりができていた。

「なにをしているのですか?」

彼は外側で眺めている生徒に近づいて声をかける。

「ああ、あれな・・・」

すると生徒は彼には目を向けずに話し始めた。

☆

「あの……申し訳ありません。これを落とされたようですけど……」

この一言から始まった。一応断りを入れるが彼女、シエスタは善意で言ったただけだ。彼女は香水を落とした貴族、ギーシュ・ド・グラモンに声をかけたのだ。丁寧にピンを両手で拾い上げながら。

しかし次の瞬間、彼は凄まじい勢いでそれを否定したのだ。

「こ、これは僕のじゃない、き、君は一体何を言ってるんだ！」

「ですが、これは確かにギーシュ様から落ちたものです……」

彼は往生際悪くさらに否定しようとする。

「ん……この小瓶はモンモランシーの香水じゃあないか」

「あれ？でもお前確かケティと付き合ってたっけ？」

そんな彼に運命は牙をむいた。こうなると彼にはもう收拾する術はない。

次の瞬間、彼に駆け寄った少女のピンタが炸裂した。その少女こそがケティである。

「ギーシュ様最低!!」

そう叫ぶと彼女が大泣きしながら食堂を走り去った後、新たな少女が彼に詰め寄ってきた。

「今のはいったいどういう事かしらギーシュ……!!」

「ち、違うんだモンモランシー……! あの子はだだの「ただの何かしらあ……?!」あ、えつと……」

モンモランシーと呼ばれた少女は彼の言い訳を遮るように叫ぶとシエスタが持っている香水を取り栓を抜くとそれを彼に思い切り彼にぶちまけた。

「もう二度とその顔を見せないで!このクス!」

そして彼女も泣きながら食堂から出て行った。

少女二人に見事捨てられたギーシュ、二股をかけていた本人が当然悪いのだがその悲しみは怒りに変わり、その怒りは理不尽にもシエスタの方に向かっていった。

「・・・おい」

「は、はいいい?!」ビクッ

「君が軽率に香水のビンなんかを拾い上げたおかげで二人のレディの名誉が傷ついたぞ!どうしてくれるんだね!あそこはただ無視すればよかつたんだ!!」

「すいません!すいません!」

シエスタはただ頭を下げ続け謝るばかりだったが他の生徒達の前でビンタ二発と香水をぶちまけられたという恥ずかしさから更に怒りがヒートアップする。

「申し訳ありませんで済めば憲兵なんていらないうんだよ!どうやら君には貴族に無礼を働くとうなるかを身をもって知った方がいいようだね・・・!」

そう言いながら彼は杖を抜いた。

☆

「つてわけ」

「なぜ助けようとしない」

「なぜつて……なんでわざわざ平民を貴族が助けるなんてマネしなきゃいけないんだい？」

「……」

するとアサシンは己の大柄な肉体を人の間を抜けるように器用に中へ入っていく。

抜けるとそこには頭を抱えてガタガタと震えているシエスタと彼女に対して杖を構えてにやにやしているギーシユの姿があった。

「待たれよ、貴族の子よ」

そして二人の間に割り込むよう彼は体を動かす。そしてさりげなくシエスタの肩を抱いて己に引き寄せる。

「アサシン、さん……」

「なんだね君は？…ああ、ルイズの使い魔の亜人か。僕は彼女に用があるんだ。そこを退きたまえ」

「それはできぬ相談だな。話を聞けばシエスタ殿はただ善意で行っただけだ。ここは許してやってくれまいか」



「そういうワケにはいかない、そのメイドはこの僕に恥をかかせた挙句二人のレディの名誉を傷つけたんだ。ただで許すわけにはいかないよ」

「この娘は傷つけていけないだろう。つけたというなら貴様の方だ。貴様がそもそも香水を落とすというへまをしなければこのような事態にならなかつたはずだ。いや、元をたどれば二股などくだらんことをするからこうなるのだ。猛省して男を磨くがいい。貴様にはまだその機会がある」

するとギーシユの表情が変わった。

「君、誰に口をきいているのかわかつているのかい？」

「これでも礼儀の使い方はわきまえているのでな。ククツ、貴様はそれに値しないだけだ」

彼はさらに青筋を立てるが無理やり深呼吸する。

「ふ、フン。やはり平民に礼儀を教える方が無駄骨というものだね」

「あきれんな、論点をすり替えようとするとは。この下郎が」  
するとその場が急に冷え込んだ。

貴族の面々は「ああ、こいつ死んだわ」と思い、シエスタは「こ、殺される」と思った。

「・・・何？」

「聞こえなかったのか？ 貴様は下郎だといったのだ。主に人格面でな。恩を仇で返すどころか己の非まで責任転嫁するとは…あきれてものも言えぬ」

「…君にも貴族への礼儀を教えた方がよさそうだね」

「まだ世界の一部分も知らぬ小僧が偉そうに教えるというのか？」

「…いいだろう！ 決闘だ！ お前には死を持って償わせてやる!!」

そう吐き捨てると彼は食堂から出て行った。アサシンはその後姿を呆れたような目で見ていた。そしてやれやれと首を振ると独り愚痴た。

「私の本業は暗殺だが…こうなれば仕方あるまい」

続く

## 第5節：ハサン先生、決闘する

一人の男が図書室の一室にこもっていた。

彼の名はコルベール。この学校の教師をしている。彼は今何かを必死に探しているみたいだ。

「こ、これは・・・!!」

そしてついに何か重大なものを発見したらしい。彼は慌てて部屋から飛び出すと学園長室に向かった。

変わってここは学園長室。

そこには美人の秘書と長老みたいな男性がいた。といっても男の方は頬に紅葉のマークをつけていたが。

「・・・別に叩かんでいいじゃろうに、ミス・ロングビル」

「セクハラは犯罪ですよ。通報しないで慈悲があるものだと思ってください」

「通報が怖くてセクハラなんぞしとらんわい」

「へえ・・・では殺されても文句は言いませんね・・・？」スツ

「じよ、冗談じゃ冗談。そんなにマジになることなかるうて・・・」

するとそこに慌ててコルベールが入ってきた。

「た、たたたたたたたたた大変です！ オールドオスマン!!」

「どうしたんじや、ミスタ・コツパゲ」

「コルベールです！ じ、じじじじじじ実はミス・ヴァリエールの使い魔のルーンを調べていましたところ、これだったのです!!」

そう言いながらオールドオスマンと呼ばれた老人はコルベールの見せたものに目をむける。すると少し険しい表情をして秘書であるミス・ロングビルに言った。

「・・・ミス・ロングビル、少し退室してもらいたいのじやが」

「了解いたしました」

そう言つて美人秘書は学園長室からいなくなつた。

「・・・で、なんじやと？ ミス・ヴァリエールの使い魔が『ガンダールヴ』じやと？」

「はい！ 『ガンダールヴ』は始祖ブリミルが、呪文詠唱中の無防備な状態を守るために

用いたと言われている伝説の使い魔です！ その力は千人の軍隊を一人で壊滅させ、並みのメイジではまったく歯が立たなかつたと！」

「ふむ……その判断は少し早計じゃと思うが……」

「た、大変です！」

するとそこにミス・シユルヴルーズが慌てて入ってきた。

「どうしたのじゃ、ミス・シユルヴルーズ」

「どうしたもこうしたもないんです!! ヴェストリ広場で、決闘をしようとしている生徒達がいいます！ 何人かの教師が止めようとしたましたが、生徒達に邪魔されて止められないようでした……」

「なんじゃ、それぐらいの事で騒々しい……で、その暇な貴族は誰と誰なんじゃ？」

「それが、片方はミスタ・グラモンで……、もう片方がミス・ヴァリエールの使い魔とことです。教師達は、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めておりますが……」

「……どうしますか？ オールドオスマン。もしかしたらがあるかもしれません」

「……では用意だけするのじゃ。もしもまずいと思つたら使つても構わん」

「は、はい。わかりました」

そう言つてミス・シユルヴルーズは出て行つた。

「……ではむしろはこの鏡から見るとするかのう」

すると鏡がぼうつと光り、光が収まると景色が映っていた。

「さあ、決闘だ!!」

広場が沸き立つ。

「よし! やれ! やつちまえ! ギーシュー!」

「たかだか平民に決闘で……常識的に考えろよギーシュー!!!」

「いやいや!ここは『貴族が上!平民が下!』を植えつけるべきだろ!!」

「おとなしくナンパしてろよギーシュー!!」

そしてヤジがいつぱい飛ぶ。

貴族の生徒たちは日々娯楽に飢えている。だからこそ今回のような決闘は格好の娯楽なのだ。

そしてその場に舞い降りる漆黒の大男。そう、我らがアサシンである。

「おや、ちゃんと来たのかい」

「案内をしてくれないせいで少々迷ったが……私は目の前の困難から逃げないと決めていたのだ。貴様と違ってな」

「……どういふことだい?」

「それは自分で考えることだな。あ、それと」

「なんだい?」

「決闘ということはどちらかが倒れるまで全力を出し合うという認識でよろしいかな?」

「……そうだね。ま、僕は君が全力を出すに値するには思えないけどね」

「慢心は己を殺すぞ?」

「慢心せずして何が貴族か!……まあ、いい。その真意は君を倒してからじつくりと吐かさせてもらうよ。では名乗らせていただくか。僕の名はギーシユ・ド・グラモン。『土』のドットメイジだ。二つ名は『青銅』。よつてワルキューレを使わせてもらう。異論はないね?」

「ふむ、かまわんよ。……では私も名乗ろう。我が名はアサシン。ルイズ嬢の銚ほことなりしサーヴァントである」

彼は懐から短剣を取り出すと少し体勢を低く構える。それを見たギーシユは鼻で笑った。

「ふん、そのナイフで何ができるのかね？」

「……」

「もはや口を利くことも忘れたか。来い、ゴーレム！」

ギーシュはバラを模した杖を振る。するとワルキューレが現れた。どつと歓声が沸く。そして彼がキザなポーズを取りつつ号令をかけるとゴーレムは動き出した。次の瞬間、一体の頭部が砕け散り、ギーシュの頬に赤い線ができた。

よく見るとそれは傷であることがわかる。彼も自分が傷つけられたとわかった瞬間、頬に痛みが走った。

しかし投げたアサシン本人は非常に驚いていた。

（なんだ今の威力は…?! 私は先ほど普通に牽制程度で少し力を抜いて投げたはずだ。断じてあの曲がりなりにも金属でできているゴーレムの頭を砕くほどの威力は出ないはずだ！そしてなんだ！この身体の底から湧き上がってくる力の根源は…!）

思考を巡らせながら彼はふと左手の甲を見た。

そこにはなんと！

なんと!!

なんと!!!



ルーンが光を発していた!!

「…?!」

これか。アサシンは今（なんとなく）理解した。自分のこの異常なまでに湧き上がってくるパワーの正体この左手に刻まれたルーンが自分に与える影響をおおよそながら理解したのだ。

「き、貴様、僕の顔に傷をつけたというのか…?!」

「…それがなにか問題でも？」

「ゆ、許さんぞこの下郎！平民が貴族には向かうことすらおこがましいのによもや傷つけるなんて…!!貴様は絶対この僕がここで殺してやる!!!」

「…クククク」

「何がおかしい!」

「浅はか。あまりにも浅はかよな。決闘とは命のやり取り。己が傷つけられる覚悟がなくやるのは愚の骨頂。今の貴様は言葉の通り浅はかなのだ。これだから2股をしたあげく両方に振られるはめになったのではないか？」

「なんだと…!」

するとアサシンは短剣をしまい左手を軽く挙げて提案する。

「まあ、落ち着け貴族の子よ。勝負を受けた私が言うのもアレだが……ここでやめにするつもりはないかね？」

「何だい、今更怖気づいたのかい？」

「ククツ、それは貴様の方ではないのか？」

「なに……？」

「足が震えておるぞ？」

「ナツ……!!」バツ

「嘘だ。それはさておき……私は忠告しているのだ。貴様はまだやり直せる機会がある。こんなくだらない決闘などやめて二人に謝ったらどうかね？間違ひなく振られるが尾ひれはつかずに済むぞ？」

「いや、それは君を殺してからでも遅くない。殺してから謝れば一件落着くぞ？」

するとアサシンの眉間にしわが寄った。

「……下種が」

「なに？」

「下種だといったのだ。その己の恥を認めぬ愚かさ。その安直かつ単純な愚策。見ていてこちらが恥ずかしくなる。失せろ」

「……君、今何と言った？」

「失せろといったのだ。3回目はないぞ。貴様など相手する価値もない。この場から潔く消えるがいい。戦うことに何の誇りや矜持きんじを持ち合わせないものなど相手しても互いのためにならない。それが決闘ならなおさらだ。再度言うぞ。この場から去れ。貴様はまだやり直せる」

これは本心である。彼も決闘という命のやり取りの場であれど将来国の一端を任されるであろう子を殺すことなどあまりしたくないのだ。これが暗殺であったなら何の温情も込めずに殺すところだがここは決闘。口では厳しいことは言っているしどういふものか理解はしているがそれでもである。いわゆる親心みたいなものだ。

「いや、逃げるわけにはいかないね。貴族は背中を見せたらいけないんだ。そんな甘い言葉で誘って勝とうだなんてそこは問屋が卸さないよ」

「………本当に良いのか？まだおぬしは若い。今逃げたら若さゆえの一時の過ちとして済むが……」

「何度言わせる気だい？男に二言はないよ」

それを聞くとアサシンは残念そうに言った。

「………忠告はしたぞ。恨むなら己を恨むがいい」

彼は短刀を構えた。それを見た

ギーシユはゴーレムを再び前進させる。

「のろい」

そう言った次の瞬間、彼は跳び上がってダークを3方向に投げつけ次々とゴーレムの頭部を砕いていく。しかしその後ろに隠れていたゴーレムに突進を許してしまい彼は殴り飛ばされた。

「ぐお?!」

彼は吹っ飛ばされるが空中で体勢を立て直すと地面に足が付いた瞬間一気に加速して先ほど殴り飛ばしたゴーレムを蹴り飛ばす。そして後ろに回り込もうとしたもう一体のゴーレムの首に向けて短剣を打ち込んで砕くと跳び上がって柱の上而降り立った。「な、なかなかやるじゃないか。だが君は次で終わりだよ」

そう言いながらギーシュは杖をアサシンに向ける。しかしそれに対して彼は冷たく言い放った。

「いや、貴様に次はない」

すると彼はガチガチに固定された右腕を上に掲げて布端をつかみ、再び跳び上がりながらするするするするとほどこいていく。

そしてすべてほどこかれた瞬間、隠されていた右腕があらわになった。

「あ、あれはなんだ?!」

「や、槍か?!」

「違う！右腕だ！でも、あんなに長い腕あるかあ?!」

それは槍だった。いや、槍に見間違うほどの恐ろしく長い腕だった。手があると思っていた右腕の先端は肘だったのだ。おそらく身長のはあるのではないかという長い腕。そしてそれこそが彼の隠し持っていた最大の武器でもあったのだ。

「宝具……」 ザバーニヤ 妄想心音!!」

彼が絞り出すようにつぶやいた瞬間、その右腕が鈍く、しかし鮮やかにオレンジ色に輝き始めた。そしてさらに腕はうねり伸び、ギーシュに一直線に向かっていく。

「う、うわあ?!」

予想外の攻撃に彼は慌てて迎撃しようとするが時すでに遅し。その指先は彼の胸部にトンッと触れるとすぐさま元の長さに戻っていく。

「な、なんだい？さっきの攻撃（？）は、こけおどしにしてはなかなかやるじゃないか」  
驚きこそしたものの冷静にふるまおうとするギーシュ。しかしその態度はアサシンの右手にあるものを見て崩れることとなる。

彼の右手にあったのは心臓だった。とくんとくんと鼓動している。しかしどこかまがまがしい色をし、そして半透明であった。彼にはなぜかそれが自分の心臓だとわかった。わかつてしまった。SANチェック失敗、アイデアクリティカルである。

「お、おい、まさか……」

「……」

「う、嘘だろ？ま、まさか僕を殺す気なのかい?! やめろ、やめてくれ! 僕はまだまだ生き続けなくちやいけないんだ! 僕はグラモン家の跡継ぎなんだぞ?! まだモンモランシーやケティとも仲直りできていないのに! なあ、お願いだから頼む! その心臓を消してくれ! 僕を助けてくれ! 殺さないでくれ! 頼む!! どうかこの通りだから……!!」

彼は公衆のわき目も降らず顔をぐしゃぐしゃにしながら土下座した。そんな状態でも貴族のプライドなのか杖はまだ握りしめていたままだったが。

彼の叫びを耳にしながら公衆はじつと仮面の暗殺者を見る。彼がどう動くのか見物しているのだろう。その眼にはありありと「殺すはずがない」という感情が込められていた。

彼はその視線を感じ、ギーシュのわめきも聞いていたが彼にとってそれは私情、私情、仕事はこれである。それにここまで来てしまったらもう引くことはできないのである。

そしてごく自然に、ただ見せびらかすわけでもなく、淡々と、まるでそれが義務かのように

ぐしや

彼の鏡像心臓を握りつぶした。

するとかくんつとギーシュはうなだれ、そのまま地面に伏せる。その口からは大量の

血があふれ出ていた。皆が感じた。感じてしまった。彼は死んだのだ、と。

暗殺者はスツと倒れ伏している彼に近づきつぶやいた。

「・・・今更だが、貴様はこの場に立つべきではなかったのだ」  
グサツ　グサツ

そしてさらに首筋にとどめを刺すように二回短剣を突き刺すとその場をあとにした。投げた短剣の回収と布を右腕に巻きつけることは忘れない。

「おい、殺したぞ?!」

「おい、しつかりしろよギーシユ!!おい!」

「ギーシユ!眼を開けてよ!ギーシユ!」

「誰か水のメイジか先生を呼んでくれえ!!」

「うわあああああああ!!!!やっぱりルイズの使い魔は亜人だったんだあああああ!!!!」

生徒の悲鳴が聞こえる。しかし彼にとつて殺人とは仕事である。そしてあの男子生徒は敵で決闘を望んでいた。彼はそれに最大限に従っただけである。

ここに悪者はいない。いるとするならば、決闘と銘打ってしまったギーシユ・ド・グラモン本人であろう。

続く



## 第6節：ハサン先生、説明する

「んあ……？」

ルイズは目覚めた。そしてゆっくりと起き上がって背伸びをするとあたりをきよろきよろと見渡す。するとベッドのわきにある椅子に二つの人影があった。一人はライバルだと嘯みついているキュルケ、もう一人はたまーに話したりするが別にそこまで悪い仲じゃないタバサだった。

「やつと起きたの？まるで眠り姫みたいだったわよ？」

「うっさいわね……。というよりあなたなんでここにいるのよ」

「先生に頼まれちゃったら、ね？」

「ああ、そういうこと……。それで私、どのぐらいここに？」

「丸一日」

「え。じゅ、授業は……？」

「……とあることがあつて中止」

「え？なにがあつたの？」

「……決闘」

「誰と誰が？」

「・・・あなたの使い魔とギーシュ」

「…え？」

「だから、あなたの使い魔とギーシュ」

「・・・な」

「「な？」」

「なんですつてえええ?!」

ルイズは思わず跳び上がってベッドに落ちるとバウンドして地面にしりもちをついた。

「いてて・・・で、結果は?!」

「あ、うん、落ち着いて聞きなさいルイズ。あまり言いたくないんだけど…」

少し洩るキュルケの代わりにタバサが途中から口を挟む。

「…死亡確認」

次の瞬間、落雷が落ちたかのようにルイズの動きが止まった。

「あ、あの、ルイズ…？」

キュルケが手を目の前で振ってみたりして意識の有無を確認する。

「はッ?!?!」

すぐに意識を覚醒したルイズはどたどたと何故か自室に疾走した。

そしてたどり着いてバンツと大きな音をたてて扉をたたきつけるように開ける。

「ん？ああ、お帰りなさいませ。マスター殿」

しかし彼女の予想に反してアサシンはごく普通に返事をした。しかも左手にははたきを持っている。

「・・・あれ？」

「いかがしましたマスター殿？」

「貴方、生きてるわよね…？」

「ええ、少なくとも今はまだここに現界していますが…それがどうかいたしましたか？」

「・・・あいつ騙したわねえ?!」

次の瞬間、彼女は部屋に来る時以上の速度で保健室に走り出し、ドアを勢いよく開ける。なんか来る途中に怒られた気がしたが気のせいである。

「急に飛び出してどこ行ってたのよ」

キュルケが半ば呆れ気味に言い放つ。だが当のルイズはそれを無視してタバサに詰め寄る。その勢いは胸ぐらをつかみかからんとするほどだった。

「タバサ！あんた騙したわね?!何が『…死亡確認』よ！生きてるじゃない！生きてるじゃない！しかも丁寧に掃除までしてたわよ?!」

「なんなの!?私何かあなたに悪いこと

したかしら?!?!」

「最後まで話聞かないあなたが悪い」

「え、あ、うん……。確かに最後まで聞かなかった私も悪いけど……何で『死亡確認』なんて言ったのよ」

「だから、その、ほら……ギーシュが、ね?」

「ギーシュが?」

「死んだ。正確に言えばあの使い魔が殺した」

次の瞬間、本当に停止した。まるでルイズの中だけ時間が停止したかのように周りを感じた。そしてそこにやってくる人が一人。

「マスター殿、いったいどうしたのですか?先程から様子がおかしいようですが……」  
そう、我らがアサシンその人である。

するとルイズはギギギと音が鳴りそうな動きで彼の方に顔と身体を向ける。

「……あ」

「あ?」

「あ、あああああああああなたあ?!!」

そして結界が壊れたかのように大声を出した。いや、出たといった方が正しいか。

「どうしましたマスター殿?!」

「あ、あなたぎ、ぎぎぎぎぎぎぎぎギーシユを殺したそうじやないの?!」

「ぎーしゆ?・・・ああ、あの方ですか。ええ、確かにこの手で殺めましたが…」

「あなた殺されるわよ?! 貴族を殺すなんて論外もいいところじやない!!!」

「臨むところです」

「あらいケメン、じやなくってねえ!!」

「少しよろしいですか?」

二人が話をしているとコルベール先生が保健室に入ってきた。生徒の3人は思わず「ヒエツ」と悲鳴を上げ、アサシンは思わず懐の短剣に手を伸ばす。

「ヴァリエール嬢に使い魔殿、オールドオスマンが呼びびです」

「え」

「できるだけ早くとのことです。では私はこれで」

そう言ってコルベールは保健室から出て行った。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「[[[[[. . . ]]]]」

部屋には静寂が訪れる。

「ど、どどどどどどどどどどどうしよう!!!  
?!!!」

その静寂をいち早く突き破ったのはルイズだった。

「……骨は拾ってあげるわ」

「……黙祷もくとう」

「勝手に殺さないでくれるかしら!!!!」

「そうですぞお二人方。不謹慎にもほどがあります」

「もとはといえばあんたのせいよ!!」ゲシツゲシツ

「ハハハ、向こう脛をけるのは痛いのでやめていただきたいですなマスター殿  
するとルイズは顔を覆いながらつぶやいた。

「わたしもうまぢむり。。。ぢさつしたい。。。」

「気をしっかり持ちましょうマスター殿。大丈夫です。私もいますから」

「あ”な”た”の”せ”い”て”こ”う”な”っ”て”ん”の”よ!!!”ドゴツ  
”ぐおつ”（ダメージボイス）

思い切り腹パンされてアサシンは思わずうめいた。

「では、話を聞かせてもらえるかのう？」

とところ変わってここは学園長室。そこには学園長であるオールド・オスマン。火の魔術を専門とするミスタ・コルベール。ヴァリエール家の麗しき三女、ミス・ヴァリエール。そして彼女の使い魔であるアサシン。どうやらオスマンの秘書であるミス・ロングビルはどこかへ出かけているようである。

あの後いやだいやだと泣き喚いたルイズだったが10分くらい泣くと覚悟が決まったのかアサシンの布のすそを引っ張ってここにやってきたのだ。しかしその覚悟も今

や風前の灯火。ガチガチと齒が鳴り、がくがくと体が震える。眼からは涙があふれそうになる。汗がだらだらと垂れて止まらない。しかし、そこにふわりと布がおおいかぶさった。

それは黒かった。思わずアサシンを見るとどうやら自分にかけてくれたらしい。ありがとうと言おうとしたが彼の体格を見て言葉が詰まった。

彼の体格は確かに布越しでもわかるくらいの大柄だった。しかし肉は削げ落ち、骨は浮かび、肌は漆黒と言つても差し支えないほどに黒かった。そしてひとときわ異彩を放つのはその顔に縫い付けられた骸骨を模した仮面だった。まあ、彼女はその下の顔を知っているのだが。

その彼のあらわになった姿にその場にいた全員が息をのんだ。あるものは思わず呪いの類かと、あるものはやせぎすだと、あるものは彼の右腕を注視した。

「話と言われましても、まずどこから話せばいいでしょうか」

「おぬしの名と経歴を」

「ふむ……」

するとアサシンは顎に手を当てて少し思案すると顔を上げた。

「……かまいませんよ。言いましょう。サーヴァント・アサシン。真名はハサン・サツバーハ。暗殺教団の長である歴代19人いた山の翁。その一人でございます」



「暗殺教団……?」

「ええ。とある宗教団体の発展型と呼べますな。ですがこれ以上は機密事項というものの。語ることはありませんね」

「しかし……、その、暗殺教団? じやったかのう。おぬしがその頭領だったとしてもその腕、ただの腕ではなからう? いったい何なのじや?」

「この腕ですか? これはシャイターンから奪った右腕です」

「しいたーん? なによそれ?」

「……まあ、あれですな。わかりやすく言えば悪魔から奪った腕を己に移植しただけのこと。それ以上もそれ以下もありません」

「はあ!!」 「むう……」

それが何か? というような雰囲気です。のけたアサシンにその場の面々は様々な反応を示す。あるものは驚愕を、あるものは恐怖を、あるものは危機感を抱いた。

「あ、あああああなたそれ下手したら死んじゃうんじゃないの?!」

「ええ、最悪なじむ前に己が食い殺されていたかもしれませぬ。ですが私は非常に運がよかったです。なんとか食い殺される前に完全に自分のものといえました。ですがその代わりに私はこの右腕に侵食され、人間としてはまともではなくなりましたが」

「もしかして、肌が黒いのって……」

「いえ、これは生前からです」

「あ、うん、そうなの……。もしかして食事を受け付けないって……」

「それはこれのせいですな。まあ、これのおかげで私は英霊の座に登録されここに召喚されているわけですから損得としてはたぶん、得の方が高いかなあと」

「そんなとんでもない腕切り落としなさいよ！」

「別に構いませんが切り落としたらもつと大変なことになる可能性がありますますがよろしいのですか？」

「……あ？」

「これ以上言うのは無粋というものです。ですが覚えておいてください。この腕を制御できたのは歴代でも私と候補生の二人だけだということを」

するとオールド・オスマンが口を開いた。

「しかし……。むしろはおぬしのその腕を危険視してるんじゃない？」

「……というと？」

「おぬしが何かの間違いで……。いや、率直に言うわい。悪意をもつて人を殺すとも限らまい？それを防ぐためにむしろはその腕を切り離して管理したいんじゃないが……」

「……」

「もちろん魔術による重ね掛けはするわい。……無理じゃろうか？」

するとアサシンから一陣の風が吹いた。いわゆる魔力放出だが周りには彼が殺気立ったように見えた。実際殺意を彼は抱いたのだが。

「…仕事とはいえ殺人は許されぬこと。それを受け入れたうえで我ら代々19人は任務に殉じてきた。我らを犯罪者だ卑怯者だと馬鹿にし、罵るのののは別に構わない。それが我等暗殺者として普通のことだからな。だが、猟奇的・快樂的殺人犯と勘違いされるのは断じて認めるわけにはいかぬ。それは我らへの冒瀆だからだ」

「し、しかし……」

「それにあなた方がいくら魔術を重ねようともこれは悪魔の腕。私の制御下を離れたらどうなるかは保証できませぬぞ?」

「う、ううむ……」

「それに私は主殿に背くつもりはありません。……ルイズ殿」

するとアサシンは彼女の方に体をむきなおした。

「な、なによ」

「貴方が殺すなどいうのであれば私は必ずや殺しはしませんでしょう。……ただし主殿に危険が迫らなければに限りますがな」

「……」

「私に命令したいのであればその令呪を使うとよいでしょう」

そう言いながら彼は彼女の右手袋をやさしく外してその令呪を見せる。教諭二人はその手の甲に刻まれた模様を見て少し場から驚いた。

「・・・どう使うの?」

「強く念じて声に出せば使えるはずですよ。さあ、その令呪を使って自害しろと」

「じ、自害?!」

「ええ。あなたは私を自害させる権利があります。・・・独断で行動したうえでこのようにすることに巻き込んでしまった。私はあなたに首を差し出さなければなりません」

「・・・命令よ。この学校で決闘するのを今後一切禁止するわ」

すると左手の令呪が紅く鮮やかに光り、模様が一つ消える。

「・・・拜命いたしました。これからも貴方のために尽くすことを誓いましょう」

そう言いながら彼はスツとひざを曲げ忠誠の態度をとる。その姿、声、態度に一切の偽りはなく、ただ純粋な誓いがあるだけだった。

「・・・なぜだ」

するとコルベールが震えるような声でつぶやいた。アサシンとルイズはスツと姿勢を正して彼の方に体を向ける。

「?」

「なぜだ！なぜなのだ！なぜ彼を殺した!」

見ていればあなたはかなりの人格者だ！そこまでまっとうな人格者ならば彼、ギーシュ・ド・グラモンはまだ未熟だとわかっただろう?!なのになぜその腕を使ってまで彼の命を殺めたのだ?!」

「・・・確かに彼は未熟でした。生きていたら成長もしたでしょう。しかし、彼は私に決闘を申し込んできませんでした。決闘とはどちらかが殺されるまで戦わなければなりません。私はそれにのっとり彼を殺めたのです」

「・・・ッ」

「それにこの腕を使ったのは確実に彼を殺めるためでした。言ってしまうえば別に短剣で始末しても良かった。だが当たり所が悪ければ余計に苦しませることになります。それはあまりにも酷ですし、我らのやり方に反すること。ならば確実に殺めることができず、手を使うのは当然でございましょう」

「しかし・・・」

「それに私は決闘を止めるよう勧告しました。しかし彼はそれで止まらなかったのです」

「そんな・・・」

「彼は果し合いを望みました。その結果がこれです。私を罰するなら罰するがいい。だが主殿を罰するのはやめていただきたい」

「な、なんでよ！使い魔の責任は主の責任でもあるのよ?!」

「では主殿は彼を殺したかったですか？」

「え・・・」

「貴方のような子供にはまだこれを背負わせるのは重すぎます。だからこれは私だけの責任でいい」

「・・・っ」

「・・・」

「・・・そ」

「・・・？」

「そ、そ、そういうわけにはいかないわ」

その声は震えていた。

「・・・なぜですか？」

「ち、小さいころからお母さまから教えられてきたわ。貴族は背中を見せちゃいけないのよ。逃げるなんてもつてのほかかわ。それは恥だもの」

「別に逃げることは恥ではないでしょう」

「え・・・?」

「暗殺者である私に貴族の矜持というものはあまり理解に乏しいですが、逃げること自体は恥ではありません。もし逃げるのが恥だということならそれは後々挑戦しなおさないことでしょう。確かに一回でやれたらそれに越したことはありません。ですが物事とはそううまくはいかないもの。再びやらなければならぬ時もあるのです」

「貴方も…失敗とかしたの?」

「ええ。100回やったなら最低1, 2回は失敗しましたよ。というより私の生前の生き方そのものが失敗と言えるでしょうな」

「え・・・」

「・・・いえ、しゃべり過ぎました。これ以上語ることはありません」

そう言いながらアサシンは学園長の方に視線を向ける。

すると二人の間だけで何かしらの会話が成立したのか学園長はコクリとうなずいた。彼もまたコクリとうなずき返すとギイツと校長室の扉を開ける。

「え・・・?」

「マスター殿、帰りますよ。明日も授業がありますからな」

「いえ、あなた方はしばらく謹慎ですよ」

「あ、はい・・・」 「・・・委細承知」

「後日ヴァリエール家とグラモン家、そして学園の3方で会議をします。そこであなた方の処罰が決まるものだと思います。行ってください」

「え」

「かしこまりました。ではわたくしたちはこれで。さき、マスター殿、しつかり」

「彼は話しかけても反応のないルイズを軽々と抱え上げるとそのまま部屋から出て行った。」

続く